

## フェンスから浮かび上がるアイデンティティの問題：

### John Hamamura の *Color of the Sea* について

#### Fences and Identity Issues in John Hamamura's *Color of the Sea*

早川真理子

Mariko Hayakawa

“Fence” generally means “an enclosure or barrier (e.g. a hedge, wall, railing, palisade, etc.) along the boundary of a field, park, yard, or any place which it is desired to defend from intruders” (*Oxford English Dictionary*). By building fences, people intentionally distinguish their place from another's. Fences have been used as motifs in various literature and theater works. Specifically, in Japanese American literature, they are often conveyed by barbed wire fences that surrounded internment camps to distinguish Japanese Americans from Americans during World War II. Japanese American literature has tended to focus inside the fences to portray the character's experiences in the internment camps. However, in John Hamamura's *Color of the Sea* (2006), fences seem to have a different meaning.

Hamamura's work focuses on two characters, Sam Hamada and Keiko Yanagi. Sam, who is depicted as a Kibei (a second-generation Japanese American who moved to Japan as a child and returned to America later), leaves Japan at age nine and moves to Hawai'i and mainland America. During his journey, he confronts three fences: the first one distinguishes Japanese Americans from the haole (the ruling classes in Hawai'i), the second one separates Japanese Americans from Americans, and the third distinguishes Americans from Japanese. Keiko, depicted as a Nisei (a second-generation Japanese American), struggles with the fence that distinguishes Japanese from Americans while moving between America and Japan. Moreover, she also faces the fence that divides femininity by country, that is, between Japanese women and American women.

*Color of the Sea* portrays the invisible fences related to identity that the characters must confront while moving between Japan and America from the 1930s to the 1940s. This paper explores the images of the fences represented in the novel in order to discuss the identity gaps the characters feel between themselves and others, and examines how these characters respond to the gaps both inside and outside the fences.

キーワード：フェンス、アイデンティティ、移動、日系アメリカ文学

Keywords: fence, identity, moving, Japanese American literature

はじめに

フェンス (fence) という言葉は一般に “An enclosure or barrier (e.g. a hedge, wall, railing, palisade, etc.) along the boundary of a field, park, yard, or any place which it is desired to defend from intruders.” (*Oxford English Dictionary*) と認識されている。つまり囲いや障壁ではあるが “any place which it is desired to defend from intruders” のように、何かから防御するため故意に造られるものとして捉えられている。そのようなフェンスは、人々にとって外の者を締め出したり中の者を閉じ込めるなど、自分の居場所と他者の場所とを区別し、二つの空間を創り上げているといえる。

様々な文学や劇作品の中には、モチーフとしてのフェンスが登場している。例えば、カール・サンドバーグの “A Fence” (1950) という詩の中の鋭い先を持つフェンスは、一般の人々や放浪者、お腹をすかせた人や歩き回る子どもたちを敷地内から区別するものとして描かれ、豊かな者と貧しい者という二つの空間を創り出す。また、ロバート・フロストの詩 “Mending Wall” (1949) では、語り手と隣人が互いの家の中にある垣根を修復しながら会話するという構成だが、その中で隣人の “Good fences make good neighbors.” という発言によって、フェンスとは何を囲い込み、何を締め出すものなのかという問題を提起する。さらに、劇作家オーガスト・ウィルソンの *Fences* (1986) では、アフリカ系アメリカ人への社会からの不条理な差別と、不満のある家庭生活という二つの問題が、家と外とを隔てるフェンスを通して表現されている。

日系アメリカ人の歴史や文学を見ると、フェンスは、第二次世界大戦時に建てられた強制収容所の周りに張り巡らされる有刺鉄線を用いたフェンスをイメージさせることが多い。戦時中、多くの日系アメリカ人は、敵性外国人として強制収容所へと移動させられた。それは 1942 年にフランクリン・ルーズベルト大統領が大統領行政命令 9066 号を出すと同時に始まり、太平洋沿岸に住む日本人移民や、アメリカ市民権を持つ日系アメリカ人二世までもが収容所へと連行され (植木 x)、その数ピーク時には約 12 万人にも達していた (Reeves 105)。その収容所の周りには有刺鉄線が張り巡らされており、銃を抱えた兵士が 24 時間見張っていたという (ベフ 138)。

有刺鉄線のフェンスは、収容所体験を詳細に描く多くの日系アメリカ文学作品の中で見られる。例えば、ヨシコ・ウチダの『荒野に追われた人々』(1982) やジーン・ワカツキ・ヒューストンの『マンザナールよさらば』(1973)、エドワード・ミヤカワの『トューリレイク』(1979) などである。このような作品では、フェンスを収容所の内と外とで区切ることで、日系人とアメリカ人とを分けるものとして用いており、とりわけその内側の出来事に焦点が置かれている。また、シンシア・カドハタの『草花と呼ばれた少女』(2006) には有刺鉄線は描かれていないものの “There was no fence, but, Sumiko realized, there was nowhere to go, either.”

(Kadohata 110) “She knew what would happen if someone tried to escape into the desert.” (Kadohata 110-11)と収容所の周りの砂漠によってその内と外が区別されており、保留地として以前からこの土地に住むアメリカ先住民と、その後この場所に収容される日系アメリカ人との関係が描かれる。

このような作品と比較した時、今回取り上げるジョン・ハムムラの『カラー・オブ・ザ・シー』(*Color of the Sea*)から受け取ることのできるフェンスのイメージは少々ずれを生じているように思われる。まずこの作品は、1930年代から40年代にかけての日本、ハワイ、アメリカが舞台であり、強制収容所に限定されて描かれているわけではない。さらに戦時中には、収容所の外側の出来事にも焦点が当てられている点で前述した作品とは異なっているといえる。そのため本作品から読み取れるフェンスはより大きな枠組みの中に置かれていると考える。それは、登場人物たちが、日本とアメリカを移動する度に立ち止まり向き合うアイデンティティに関する障壁を示唆している。本論文では、『カラー・オブ・ザ・シー』の中で、移動する二人の主要登場人物を通して見えてくるフェンスのイメージを捉え、他者から与えられるアイデンティティと自身が持つアイデンティティとの間にずれが生じていることを示す。そして、そのずれに対して両者がいかなる態度を示しているかを考察する。

## 1 移動とフェンス体験

まず本節では、移動に注目した小説のあらすじと、著者ジョン・ハムムラのフェンス体験について紹介していきたい。『カラー・オブ・ザ・シー』は、全知の語り手の視点から、主要登場人物であるサム・ハマダという少年と、ケイコ・ヤナギという少女に焦点を置いて語られる。サムはハワイで生まれた二世だが、赤ん坊の頃に家族で広島へと渡り、その後9歳で再度ハワイへ戻るという経験をしているため帰米二世<sup>1</sup>と呼ばれる世代として描かれている。彼はハワイのプランテーションで単身働いていた父親を手伝うために、母親と兄弟を広島に残し再度ハワイへと渡る。しかし家族を思いホームシックになると同時に、初めて直面する日系アメリカ人としての立場に困惑する。だが、周りの日系人や父親の励ましによって、アメリカで一人生きていくため徐々に自分を磨き上げていく。

そして高校卒業後には、カリフォルニアへと移動し、アメリカ人の家庭に住み込みながら家事の手伝いなどをするスクールボーイや日本語教師として働くと同時に、後に恋人となる日系二世少女ケイコとの物語が描かれる。さらに、戦争が始まるとアメリカ陸軍情報部の日本語教師として、アメリカ軍に軍の専門用語に重点を置いた日本語を教える業務に就いた後、沖縄へと派遣される。そこではアメリカ軍の一員として、捕虜となった日本軍兵士と話をし、情報収集する業務に配属される。アメリカへの忠誠心はあるものの日本には家族がいる。日本人の気持ちもアメリカ人の気持ちも同時に理解できるサムは、戦争を通して両国の狭間で自分の思いと自身の立場に葛藤する。

続いて、ケイコはカリフォルニアで生まれ育った日系アメリカ人二世少女である。彼女が他の日系二世登場人物と異なる点は、1940年から1941年の一年間を日本で過ごすところである。戦争直前にアメリカへ強制帰国をさせられるまで、結婚を視野に入れた、親に決められた見合いのために名古屋にある親戚の家で過ごし、女子高校に編入する。そのような生活の中でケイコは、高校の先生にアメリカ人であり日本人でもある自身を認めてもらえず、アイデンティティに苦しむ。同時に日本人との出会いを通して、日系アメリカ人女性と日本人女性それぞれの女性性の捉え方を再認識していく。その後、カリフォルニアに戻った後には第二次世界大戦が勃発し、アーカンソー州に建てられたローワー収容所へと連行される。このように、移動とともに成長し大人になっていくそれぞれ異なる二人の人生がクロスされ、最終的に夫婦として二人が共に戦後の日本に降り立つ場面で小説は終わる。

このような物語を書いた著者ハムムラ自身も、移動する中でフェンスに向き合ってきたように思われる。彼は人生の中で二つの移動を経験する。一つ目は、幼少期に経験した国を超える移動である。ハムムラは、1945年にミネソタ州に建てられた軍の病院で生まれた日系アメリカ人三世作家である。当時、父親はミネソタ州キャンプ・サベイジ (Camp Savage) とスネリング砦 (Fort Snelling) でアメリカ陸軍情報部の日本語教師をしており、彼の母親はアーカンソー州のローワー収容所で暮らしていた<sup>2</sup>。ここから、ハムムラの父と母が、サムとケイコのモデルとなったことが推測できる。戦後、ハムムラは広島に住む父方の親戚の手助けをする為、アメリカ軍に再度志願した父親とともに日本へ渡ることになる。しかし、日本で過ごしたとはいえず東京、練馬区に当時建てられたグラントハイツというアメリカ軍基地内で大半を過ごしていたため、基地内と外との間に隔たるフェンスを通して外の日本人を見ながら、子どもなりにアメリカ生まれの自分との違いを感じていたという (John Hamamura)。その後ハムムラはカリフォルニアへと渡るが、ここでもまた日本にいた時と同じく、“I came to California and suddenly, it feels like there’s another fence.” “I am suddenly Japanese and outside of my house, they don’t like me.” (Fancher) と自身の立場に困惑し、彼と現地のアメリカ人との間を見えないフェンスが隔てているような思いを抱く。このように幼少期に両国を移動したハムムラは、その狭間で、自身のアイデンティティに関する苦悩を感じながら過ごしてきたことが分かる。

続く二つ目の移動とは、第二次世界大戦の強制収容所への移動を指す。これは彼が直接経験したものではないのだが、両親に起こった出来事であり、彼がこの小説を書こうと思い立った動機でもある。ハムムラのウェブサイトには “I waited years until I was old enough to ask the right questions and to hear the stories the adults would never share with children.” と書かれており、この「大人が決して子どもと共有することのなかった物語」とは、戦時中の日系アメリカ人の出来事のことであろう。多くの三世は、公民権運動や黒人解放運動に触発され自身の民族意識に目覚める中で、戦時中、有刺鉄線に囲われた強制収容に関する経験を語ろう

としない親世代に複雑な思いを抱いてきたのであり、彼もその中の一人であった (John Hamamura)。そして 1990 年、様々な悩みを抱える日系三世を互いにサポートできる居場所をつくるための「三世レガシープロジェクト」<sup>3</sup>の創設メンバーの一人となっている。しかし、その年、ハムムラが真剣にその歴史を調べようとする姿を彼の父親が目撃したことがきっかけとなり、彼と父親は地図や昔の写真を探しだし父親の歴史を共に遡り、沈黙された親世代の経験を執筆の中で明らかにしていった(Mayhew)。そのため本作品は、ハムムラの幼少期の移動経験に対する感情が織り込まれた家族史であるように考えられる。

## 2 日本、ハワイ、アメリカを移動するサムフェンス

幼少期から日本、ハワイ、アメリカ間を移動し続けるサムの人生は、小説の冒頭で彼の母親が “Isamu, you are nine years old and starting a great circle in your life. Someday you will return to close that circle and begin a new one.” (5) と言いながら彼をハワイへ送り出すように、一筋縄ではいかないもの、新しい出来事が待ち受けているものとして表わされている。そのようなサムが直面するフェンスは、大きく分けて三つ登場する。本論文でフェンスは、物理的な建造物という意味でのみ用いるのではなく、不可視の境界としても用いる。

まず一つ目は、日系人と *haole* (ハワイに住む支配階級の人々) とを隔てるものとして、彼がハワイへと移動した後の場面に描かれる。ハワイに降り立ったサムは、父親ヤスベイが他の日系人の仕事仲間と大声で会話をする姿にサムライの姿を重ね合わせ、その勇ましさに圧倒させられる。しかし、そのような感情はすぐさま失われる。彼は、父親がプランテーション・マネージャーに何度も頭を下げる姿や、マネージャーの気に障らないよう音を立てずに歩く姿を目撃することで、その姿を「無力な肩と陥没した胸を持つ、怖じ気ついた猿」(12) のようだと感じ始める。ヤスベイのような日系一世の多くは、日本語が話され、日本食が気軽に手に入るような日本人に適した場所だと思い、ハワイへ渡ったという(Okamura)。だが、実際に到着すると白人からの差別は深刻な問題で、日系人は太陽の下で 10 時間以上働かされ(植木 vi)、それで得た少しばかりの給料も日本で暮らす家族に送らなくてはならない状況であった。そのため労働者であるヤスベイの手はサムの「絹のような柔らかい手」とは正反対の、いくつものたこができた「蟹の足」のような外見をしている。そのようなハワイでの生活にヤスベイは、“But now no matter how hard I try, I can’t climb any harder. *Haole* rules and laws block me.” (7) と、今以上の暮らしを求めることができないのは、*haole* によって作り上げられた法律が妨げとなっているためであることをサムに伝える。

サム自身も同じような経験をしている。彼と関わる Bidwell という名のプランテーション監督は、まるでサムが目に見えない存在であるかのような態度を取る。そして、“Bidwell’s expression, his entire manner, oozes contempt” (43) のように、日系人に対して軽蔑の眼差しを向け締め出すと同時に *haole* の空間を防御する。また、イサムという名前が「サム」という



西洋の名前に変えられた時、彼は、“Even my name,’ whispers Sam. ‘Stolen from me” (14)と、ハワイに渡ったことで家族だけでなく、自身の日本名というアイデンティティをも盗まれた気持ちになり泣き出す。このようにサムの前には、日系人と haole とを分け、それぞれの空間を創り出す見えないフェンスが存在することが読み取れる。

しかしその中でヤスベイは、“It was a gift. Your new name will help you fit in. Help you build your future. Today an American name. Tomorrow school.” (15)と、サムという新しい名前は希望になり得ることを告げる。そして “Education. That’s the key. Else you’ll end up a stinking laborer like Kojiro or a clerk like me. What you saw today sickened you, yeah? Remember it. I don’t want you to have to grovel like me. Not ever.” (15)からは、ハワイの現実を目の当たりにしたサムにとって、父親が受けられなかった教育を受けることが、フェンスに向き合う方法だと伝えているのである。さらに、ハワイ生まれでアメリカ市民権を持つ二重国籍者のサムは、家族の「当たりくじ」(61)として希望を託されると英語を貪るように勉強し、また、武道を学ぶことによって、日本人としての自己と同時にアメリカ人としての自己を創り上げていく。

続く二つ目のフェンスは、第二次世界大戦時に日系人とアメリカ人とを隔てる有刺鉄線のフェンスである。当時、多くの日系アメリカ人は敵性外国人として強制収容所へと連行されたのだが、その後ルーズベルト大統領が “Americanism is matter of the mind and heart; Americanism is not and never was a matter of race or ancestry.” (Reeves 143) という声明を出すと、多くの二世青年たちは、アメリカへの忠誠心を示すためにアメリカ軍として収容所の外へと出て行った。サムも、彼らと同様にフェンスの外側に出てアメリカ軍語学学校の日本語教師としての業務に就いた後、沖縄へと派遣される<sup>4</sup>。では、当時のサムの心情はどのように描かれているのだろうか。次の回想からは、13年間暮らしたアメリカへ「忠誠心を証明するチャンス」(214)と考えていると同時に、相反するもう一つの感情を抱いていたことが読み取れる。

*What if I raise my rifle, and the Japanese soldier in my sights is my younger brother, Bunji? I haven’t seen Bunji in almost thirteen years. Would I even recognize him? What if the Japanese soldier attacking me looks like Papa or Fujiwara-san?(225)*

アメリカに渡った後も頻繁に家族と手紙のやり取りをしているサムは、他の日系二世とは異なり、日本での記憶を保持している。家族以外にも、広島での学校でのクラスメイト、先生、近所の人々、商店の店員などを思い起こす場面からも分かるように(292)、アメリカへの忠誠心と同じくらい日本への愛情や繋がりがあることは明らかである。そのため日本を敵に戦うことに対して常にためらいの気持ちを抱いている様子が分かる。

三つ目のフェンスは、このような二国間で対立する彼の気持ちを具体的に説明するものとし

て日本人とアメリカ人とを隔てて描かれる。サムは、沖縄で捕虜となった日本軍から情報収集をする時、日本語を使い、尊敬の念を持ってその日本人と接しようと試みる。そして、日本軍捕虜が、彼ら自身の切腹を要求した時、サムは “They [Americans] do not understand the pain and sorrow in the hearts of Japanese soldiers ordered to die. I do. My flesh and blood and bone are just as Japanese as your own.” (266) と言い、自分は同じ日本の血を分けているため、日本人の気持ちを理解できることを強調する。しかし、アメリカ軍に所属する彼には日本軍のためにできることなど何もなく、彼らは捕虜のままで取り調べに送られていく。本文中に日本人を囲い込む有刺鉄線が描かれ、彼らに向かってアメリカ軍人が大声を張り上げている様子が言及されているように(247)、日本人とアメリカ人との間には確固たるフェンスが描かれている。そして “He sees thatch-roofed house and a barbwire compound of Okinawan peasants guarded by American soldiers” (246) と、サムが囲いの内側を眺めているところからは、サム自身、その外側に置かれている者であると認識していると考えられる。さらに、原子爆弾投下後、再び日本を訪れた時、アメリカ軍服を着ている彼に対して日本人は、

... glassless windows filled with eyes, staring, curious eyes intrigued, perplexed, envious, hostile, a gauntlet of eyes piercing him – *Who is this lone soldier sharing our face, this man with the samurai eyes and ugly American GI uniform?* (305)

と、見た目の曖昧さに不審な目を向け警戒する。このように、いかに両国を理解する人物だとしても、サムは日本人と同じ立場になることはできない。彼はこの状況を、平重盛の言葉を用いて、“*Ko naran to hosseba chu naran; chu naran to hosseba ko naran.*” (268) と告げる<sup>5</sup>。つまり、彼が日本に忠誠心を示すのであればアメリカに背を向けなくてはならず、アメリカに忠誠を誓うのならば日本に対抗しなくてはならないという意味を持つ。そして “a gauntlet of eyes piercing him” という「彼を貫く視線の攻撃」という表現からも、戦時中、二重のアイデンティティを所有することに伴う苦しみは、痛切なものであることが分かる。

このサムの苦しみは、実在した帰米二世、伊丹明の葛藤を思い起こさせる。加州毎日新聞社の記者として働き、「優れた日本人であることが、最良のアメリカ市民である」と、日本人として誇りを持つことと、アメリカを尊重することの両方を説いてきた伊丹は(鮫島 39)、同じく戦時中に日本語教師となり日本へと派遣された。日本とアメリカ双方のために行動する伊丹にとって、自身が日本人でありアメリカ人でもあるという認識は、戦前はさほど問題にならなかったように思われる。しかし、戦争を通して日本とアメリカの間に翻弄され、気持ちが引き裂かれ、1950年に自らの命を絶つことになる。さらに、あべよしおが書いた『二重国籍者』(1972)の帰米二世主人公、岩村武は、インドに派遣される中で現地の日本人捕虜と自身との違いを感じると同時に、現地のインド人との間にも「見えない境界線」(107)があることを認識する。

サムもフェンスを通してアイデンティティの二重性に葛藤し、アメリカ軍として戦ったことに対する罪悪感から命を絶とうとする。しかし、彼はその時、次のようにハワイで学んだ武道を思い出す。“When one reaches the point of *mu* ... the void. Nothingness. Then? Sam’s eyes widen. He feels himself breathing the chill air. He feels *ki* pulsing his body.” (313) 作中で“*mu*”とは、“force without force, mass rendered weightless and spun around a void of absolute stillness” (37)のように、空虚さの中で湧いてくる、戦うために用いられることのない精神的な力のことを意味している。その精神力を自分に重ね合わせることで、“That this moment’s test might not be about measuring his strength, but his gentleness.” (313)とありのままの自身を受け入れる寛容さを持つことを選択する。そして自分の抱える葛藤を、移動の中での「修行」という言葉に置き換える。しかしこれは、彼がどちらのアイデンティティも喪失しているという意味にはならない。サムは、原子爆弾の放射線を浴びて苦しむ広島に住む彼の妹や、片腕を無くしアメリカに戻った日系二世の友人を思い出すとともに、“all hurt, even those with no outward injuries, carrying wounds invisible within” (314)と戦争を経験したことで心の内側も傷ついた日米両国の多くの犠牲者に目を向ける。その時 “Survivors. Shattered, fragmented, torn. Crippled. But alive. Living with their pain. Caring for children.” (314)という気持ちを持って生きようと決心するところから、彼が二重のアイデンティティを持ち続けながら両国で生きていくことへ微かな希望を見出していることが窺えるのである。

### 3 ケイコのフェンスと女性性

ハムラは、本作品の中で日系二世少女ケイコにも焦点を当てることで、女性の視点から見えるフェンスも描いた。まず、カリフォルニアで生まれ育つケイコは、多くの二世が抱える日本人とアメリカ人とを隔てる障壁に直面していることが分かる。彼女は、授業中に書いた詩“Speaking to me on the telephone, / who would know the color or shape of my eyes? / Who knows what it is to be / a Japanese girl in America? / Who can see past my polite smile? / In a sunny autumn vineyard / who sees the color of the shadows?” (77-78)の中で、自身を「礼儀正しい笑顔」の内側におり、「秋晴れのブドウ畑」と対比した「影」という抑圧された存在であることを指摘している。アメリカで教育を受けた日系二世の多くは、自身をアメリカ人であると捉えてきた(78)。だが、日本人の親を持つ彼らにとって日本の価値観は簡単に消すことのできるものではなく、また、アメリカへの同化も望まれなかったという苦悩を抱えていたという(ナカノ 91)。このように、どれほど自身が日本人の顔を持つアメリカ人であると思っていたとしても(78)、ケイコは日本人の空間から外へ出ることはない。さらに、そのような意味を持つフェンスは戦争時の“barbwire fence” (219)という目に見えるフェンスとしても描かれており、ケイコがアメリカ兵に “Why are you treating like this? We’re Americans.” (213)とアメリカ市民権を所有していることを主張しても、“No you’re not.” “You’re Japs.” (213)という言葉で



片付けられてしまう。そして、日本人とみなされローワー収容所の内側に留められる様子が描かれているところからも、ケイコの持つアイデンティティと他者から付与されたアイデンティティの間には差異があることが分かる。

その一方で、彼女は戦前日本へ移動し一年間を過ごすことによって、この日本人とアメリカ人とを隔てるフェンスの外側に立つ経験もしている。ケイコは名古屋に渡り、高校に編入する。町には憲兵隊が徘徊しアメリカを敵視するプロパガンダが張り巡らされている状況で、編入先の先生から「日本人なのか、アメリカ人なのか」(135)という自身の選択を迫られる。その時の彼女の心情は次のようである。

Keiko thinks, *Just say “Japan” and be done with it.* Her fear, her eagerness to please and fit in, makes her want to say it. But she knows everyone will sense her ambivalence. *In America, racist children threw rocks at me and adult bigots called me a dirty Jap. Now here in Japan, are they going to call me a dirty American?*(135)

アメリカで育った日系アメリカ人として、ケイコはどのようにどちらか一方の国に所属することを躊躇する。そして、アメリカと同様、日本でも異質な存在として扱われることに不安を感じていることが読み取れる。しかし先生は“Japanese, American, or nothing” (136)と、彼女は片方にしか所属できないことを告げ、一方的に“American girl”(150)と決めつける。そして“*She needs to be put in her place.*” (142)という部分からは、ケイコを敵国の人間として日本人の空間からその外側へと締め出そうとしていることが分かる。

さらに、彼女が女性性の違いで日米の隔たりを感じる時も、ケイコは外側、つまりアメリカ側に立って物事を見ている。ケイコは高校に通いながら見合いをし、結婚相手を探すという目的を持って日本へ渡っている。しかし、本文中で述べられているように、彼女を含め多くのアメリカ人女性が捉える、強さと自立性を持った者としての女性(154)と、日本人が求める、結婚をしたら夫とその両親に忠誠を捧げるような従順な日本人女性(154)とでは、その女性性が大きく異なっていることが分かる。そのため、日本生まれの母親はケイコに“*Men are comforted by weak women.*” (140)と、日本人女性らしく振る舞うことで日本人男性を安心させるようにと告げる。同時に、女性が力を持つことは「最も嫌がられる特徴の一つ」(140)であると諭す。しかしケイコは“*But don’t some men value warrior women?*” (140)と、アメリカ人としての困惑を示すのである。また、見合いを成功させるため口数少なく微笑をし、春の桜のような (144)日本人女性を演じるが、その後“*I never felt so out of place in my life.*” (144)と、自身の居場所の無さを感じている。

このケイコの戸惑いは、モニカ・ソネが書いた『二世娘』(1953)の中でも言及されている。同じく日系二世として描かれるカズコも日本へ渡った中で自身と日本人との違いに気付き、叩か

れても抵抗や怒りを示さず泣き崩れる(Sone 94)という態度を取る日本人女性の女性性に最後まで違和感を感じている。さらに、*Densho Digital Archive*のインタビュー資料の中にも、日本人女性の衣服や小さい歩幅の歩き方などに違いを感じていたという日系アメリカ人女性による言及があることから<sup>6</sup>、これは日本への移動経験を持つ日系アメリカ人女性に共通する気づきであることが考えられる。

では、ケイコはいかにそのフェンスに向き合ってきたのだろうか。彼女はこの場面で、戦前から体育の授業で広く行われていた薙刀を初めて経験する。本文中で薙刀は、まず、日本人であれば習得できるものであり、逆に日本人でなければ「永久に謎めいたもの」、「達成できないもの」(142)として描かれる。そのような薙刀を何度も練習し最後には習得することで、彼女はアメリカ人であるとともに日本人でもあるという自己を確立していく。そしてこのアイデンティティに自信を持つ様子が、“They see Keiko has embroidered two small flags onto her undershirt – one Japanese, one American.” (165)と、二つの国旗が彼女の衣服の内側という見えない部分に刺繍されていたという描写から判断できる。

さらに、ケイコの先生が、薙刀を訓練することで “He wants the girls to gain the pride and self-confidence that come with a strong, supple body.” (147)と考えているように、薙刀は同時に女性に誇りと自信を与えるものとしても描かれている。薙刀には、源平合戦の時に巴御前と板額御前という二人の女性によって用いられたという説があることから、中世の日本人女性武士という強い女性のイメージを持つと言われている(ベレック 30)。ケイコの母親は、写真花嫁<sup>7</sup>としてアメリカに渡ってからずっと夫や家族に人生を捧げてきたにもかかわらず、「決断力のない、歳をとった女性」(140)であると思われてきた。しかしそのような母親が薙刀を持つ時、ケイコは、弱さとは真逆になる母の姿を目撃し、母親を、家族を守る力強い“mother tiger” (140)と重ね合わせる。また、その後、女性が抑圧された状況の中で「沈黙の痛み」(155)を受けるのであれば結婚はしないと断言する日本人女性に出会うことで、“The strong women I know are all Japanese. When I listen to you, I realize how much strength it takes for a woman to remain true to herself.” (155)と、日本人女性を「強い女性」であると捉えるようになる。ケイコは、日本人女性の考えに自身を改めたり、最終的に日本で結婚をすることにはならない。だが、フェンスの反対側で異なる考え方を持つ日本人女性を理解すると同時に、その女性性のイメージを変容させていることが読み取れるのである。

おわりに

本稿では、ジョン・ハムラの『カラー・オブ・ザ・シー』を、フェンスに注目して考察してきた。これまでの多くの日系アメリカ文学作品では、強制収容所を取り囲む有刺鉄線としてフェンスが表現されている。また、その内側の出来事に焦点が当てられることが多かった。しかし本作品の中では、日本とアメリカ間を移動する度に直面し立ち向かう「見えないフェンス」

を意味するものとしても描かれており、それは帰米二世と、移動経験を持つ日系二世という二人の主要登場人物が抱えるアイデンティティの二重性に関する問題を表面化している。そして、そのフェンスの内と外の両側を描くことで、日本とアメリカ両国の視点が含まれたフィクションとなっていることを明らかにしてきた。

近年は世界中で人の移動が増え、アメリカを見ると移民流入が制限されているとは言われているものの、難民として家族とともに、また一人で移動をするなど様々な理由で移動をする人は今も後を絶たない。本作品は、移動によるフェンスの存在を考えさせその中で成長する人々の心情を丁寧に表現している点で、世界から見える問題を投げかけているとも考えられよう。

#### 註

1. 帰米二世とは、アメリカ生まれだが、幼少期に送られた日本である程度教育を受け、その後アメリカに戻ってきた日系アメリカ人二世世代を意味する。(*Encyclopedia of Japanese American History* 243)
2. ディスカバー・ニッケイによるウェブサイト“Sansei Legacy Project: Meet Authors John Hamamura and Shizue Seigel”を参照した。
3. 「三世レガシープロジェクト」は、Anne Nakao 執筆の“Asian Pacific American Heritage Month”というウェブサイトの記事内に、政治活動をする目的を持ったプロジェクトではなく、強制収容に関心を持つ非活動家の三世が集まり話し合うコミュニティであると言及されている。
4. 多くの帰米二世は「日本で教育を受けた日本人であり、とても危険で信用できない」(大谷 97)という暗黙の判断で除隊させられたが、除隊の基準は明確にはなっていない。サムの他にも、『ジャパン・ボーイ』(1983)に記録されている帰米二世の東久保輝男や、『二重国籍者』の岩村武、また、伊丹明などもアメリカ軍として派遣されている。
5. この一文は、平重盛の言葉「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず。」を用いている。
6. インタビュー資料は、Densho Digital Archive のウェブサイト“Mitsuye May Yamada – Joe Yasutake – Toshi Yasutake Interview”の中の〈Segment 26〉を参照した。
7. 写真花嫁とは、互いの写真を交換することによって、アメリカに住む日本人男性と結婚する手配が整えられたその後に、アメリカに渡った日本人女性のことを指す (Okamura 20)。

#### 引用・参考文献

“Kibei.” *Encyclopedia of Japanese American History: An A-to-Z Reference from 1868 to the Present, Updated Edition*. 1993. The Japanese American National Museum, 2001, p.243.

Fancher, Lou. "Lafayette: 'Literary Feast' Features Stories of those Who Tell the Stories." *The Mercury News*, 1 Nov. 2012.

[www.mercurynews.com/2012/11/01/lafayette-literary-feast-features-stories-of-those-who-tell-the-stories](http://www.mercurynews.com/2012/11/01/lafayette-literary-feast-features-stories-of-those-who-tell-the-stories).

"fence." Def.5. *Oxford English Dictionary*, oed.com.

Frost, Robert. "Mending Wall." *Complete Poems of Robert Frost 1949*. The Library of America, 1995, pp.39-40.

Hamamura, John. *Color of the Sea*. Anchor Books, 2006.

"haole." *Oxford English Dictionary*, oed.com.

Houston, Jeanne Wakatsuki, and Houston, James D. *Farewell to Manzanar*. Houghton Mifflin Company, 1973. ジーン・ワカツキ・ヒューストン・ジェイムズ・D・ヒューストン『マンザナールよさらば』、権寧訳、現代史出版社、1975年。

"John Hamamura." [www.johnhamamura.com](http://www.johnhamamura.com).

Kadohata, Cynthia. *Weedflower*. Simon and Schuster, 2006.

Kim, Elaine H. *Asian American Literature, An Introduction to the Writings and Their Social Context*. Temple UP, 1982.

Kitano, Harry H.L. *Japanese Americans, the Evolution of a Subculture*. Prentice-Hall, 1976.

Mayhew, Don. "Self-Identity, War Fill 'Color of the Sea'; INFOBOX: [FINAL Edition]." *The Fresno Bee*, 2 Nov. 2006. *ProQuest*, [search-proquest-com.ejgw.nul.nagoya-u.ac.jp/docview/267918658/CCCAAFF669E49C9PQ/4?accountid=12653](http://search-proquest-com.ejgw.nul.nagoya-u.ac.jp/docview/267918658/CCCAAFF669E49C9PQ/4?accountid=12653).

Mitsuye May Yamada – Joe Yasutake – Toshi Yasutake Interview." *Densho Digital Archive*, 2002. [ddr.densho.org/media/ddr-densho-1000/ddr-densho-1000-135-transcript-90b40f7e60.htm](http://ddr.densho.org/media/ddr-densho-1000/ddr-densho-1000-135-transcript-90b40f7e60.htm).

Miyakawa, Edward T. *Tule Lake*. 1979. Trafford, 2002.

Miyoshi, Nobu. "Identity Crisis of the Sansei and the Concentration Camp." *Sansei Legacy Project*, [www.momomedia.com/CLPEF/sansei/identity.htm](http://www.momomedia.com/CLPEF/sansei/identity.htm).

Nakao, Annie. "Asian Pacific American Heritage Month." *SFGate*, 26 May. 1996, [www.sfgate.com/bayarea/article/ASIAN-PACIFIC-AMERICAN-HERITAGE-MONTH-3140782.php](http://www.sfgate.com/bayarea/article/ASIAN-PACIFIC-AMERICAN-HERITAGE-MONTH-3140782.php).

Okamura, Jonathan. Y. *From the Race to Ethnicity: Interpreting Japanese American*

- Experiences in Hawai'i*. U of Hawai'i P, 2014.
- Reeves, Richard. *Infamy: the Shocking Story of the Japanese American Internment in World War II*. Henry Holt and Company, 2015.
- Sandburg, Carl. "A Fence." *Complete Poems*. Henry Holt and Company, 1950, p.16.
- "Sansei Legacy Project: Meet Authors John Hamamura and Shizue Seigel." *Discover Nikkei*,  
[www.discovernikkei.org/ja/events/2006/05/20/871](http://www.discovernikkei.org/ja/events/2006/05/20/871).
- Sone, Monika. *Nisei Daughter*. 1953. Washington P, 2014.
- Uchida, Yoshiko. *Desert Exile: The Uprooting of a Japanese American Family*. U of Washington P, 1982. ヨシコ・ウチダ『荒野に追われた人々』羽多野和夫訳、岩波書店、1985 年。
- Wilson, August. *Fences*. Penguin Group, 1986.
- あべよしお『二重国籍者』東邦出版社、1972 年。
- 植木照代「日系アメリカ人の歴史と文学」『日系アメリカ文学—三世代の軌跡を読む』植木照代、ゲイル佐藤編著、創元社、1997 年、v-xxiii 頁。
- 大谷勲『ジャパン・ボーイ：日系アメリカ人たちの太平洋戦争』角川書店、1983 年。
- スティーブ・鮫島『天皇を救った男—アメリカ陸軍情報部・日系帰米二世 伊丹明』南方新社、2013 年。
- 野崎京子『強制収容とアイデンティティ・シフト—日系二世・三世の「日本」と「アメリカ」』世界思想者、2007 年。
- ベフ・ハルミ『日系アメリカ人の歩みと現在』人文書院、2002 年。
- ベレック・クロエ「なぎなたの国際発展とジェンダー・イメージの変容」京都大学人間・環境学 24 巻、2015 年、29-41 頁。
- 松永京子「「ボーダー」としての有刺鉄線—Silko, Kogawa, Kadohata の作品を中心に」*AALA Journal*, 24 号、2018 年、16-25 頁。
- 水野真理子「不誠実を選択した帰米二世の物語—Tule Lake から見えるもの—」*AALA Journal*, 12 号、2006 年、80-90 頁。
- メイ・T・ナカノ著『日系アメリカ人女性 3 世代の 100 年間』サイマルアカデミー翻訳科訳、サイマル出版、1990 年。
- 森本豊富「第一章「帰米二世」という生き方」『移動する境界人「移民という生き方」』現代資料出版、2009 年、1-53 頁。
- 山城正雄『帰米二世：解体していく日本人』五月書房、1995 年。